

聖書：ローマ6：5～14

説教題：手足を義の器として

日時：2015年9月13日

「信仰による義」について語って来たパウロは、この6章から「聖化」について語り始めています。前回、聖化を考える上で聖書の中で最も大切な聖句の一つである6章2節の御言葉を見ました。そこにクリスチャンのことが「罪に対して死んだ私たち」と語られました。私たちはこれを見て、こう思いやすいのではないのでしょうか。「いえいえ私はまだまだ罪に対しては死んでいません。私はまだまだ罪を犯す弱い者でございます」と。こう言っておいた方が言い訳が立ちますし、罪の生活を肯定・許容することができますし、自己弁護することができます。しかしこれでは最初から負けることが決まっているようなものです。かえって罪に屈する生活を助長するものです。パウロはここでクリスチャンが持つべきアイデンティティーとして、クリスチャンとは皆、「罪に対して死んだ人である」と言いました。これはどういう意味でしょうか。前回、そのことを見ましたので詳しくは繰り返しません。が、人は死ぬとそれまで生きていた世界とは関わりがなくなります。死ぬ直前までは「この世」という領域の中に存在し、「この世」に属していますが、死ぬとこの世界から外に出ます。そしてこの世界とは関わりがなくなります。それと同じように、「罪に対して死んだ」とは、かつて私が所属していた罪が支配する世界と決定的なお別れをしたということです。キリストを信じる以前の私たちの生活は、5章21節にあったように「罪が死によって支配する」という領域での生活でした。そこから私たちは違う領域に移されたのです。そういう意味でかつての罪の支配、罪の世界に対しては死んだのです。

こう言える根拠としてパウロが述べたのは「キリストとの結合」という教理です。前回パウロは3節で、ローマのクリスチャンたちに彼らが受けた洗礼のことを思い起こさせました。洗礼の本質的な意味は3節にあるように「キリスト・イエスにつく」ということです。すなわちキリストに結び合わされるということです。5節では「つぎ合わされて」と表現されています。ぶどうの木と枝が一つの命でつながっているように、信じる者は今やキリストと有機的な結合の内にあります。そのクリ

ストは私たちの罪のために十字架にかかり、そこで私たちの罪をすべて清算してくださいました。とするなら、キリストと結ばれた私たちは、キリストの十字架の死において自分の罪の精算がなされたこととなります。私たちはそこでそれまでの罪が支配する世界に対して死んだのです。そして私たちは単に死んだだけではありません。5節に「必ずキリストの復活とも同じようになる」とあります。すなわちキリストの復活のいのちに生かされている者となっている。こういう自分を良く受け止めることが大切です。このことをパウロは今日の箇所でもう少し言葉を補って語って行きます。

まず6～7節では、キリストの「十字架の死」が私たちに対して持っている意義が述べられています。「私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが減びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。死んでしまった者は、罪から解放されているのです。」この「古い人」とはキリストを信じる以前の私たちのことです。人類の祖アダムとつながっていただけで、罪の力に支配されていた私たちを指す言葉です。しかしイエス様を信じた時、その古き人はイエス様とともに十字架につけられました。その結果は果たして何でしょうか。それはまず「罪のからだが減びる」ということです。この「罪のからだ」とは、罪に支配されていた以前の私たちのからだのことです。その「罪のからだ」は死んだ。私たちはしばしば、信仰を持って、この体の様々な欲情は変わらないと考えがちではないでしょうか。どうせこのからだは天国に行くまで罪に支配されたものだ、これはどうにも制御できない、どうしようもないものだ、と。それに対してパウロは違う！と言っているのです。罪に支配され、罪によってコントロールされていた「罪のからだ」は死んだのです。また6節に「これからは罪の奴隷でなくなるため」とあります。以前は罪の奴隷だったかも知れませんが、今や罪が主人である私ではなくなりました。キリストと結ばれ、キリストの十字架によって、以前の私は死んだのです。キリストが罪の値を全部支払ってくださったので、罪はもう私の上に何の支配権も持てなくなりました。そういう者として、7節にあるように、私たちは今や罪から解放されているのです。以前のような罪の束縛の下にある者ではなくなったのです。

次に8～10節では、キリストの「復活」が私たちに対して持つ意義が述べられています。8節：「もし私たちがキリストとともに死んだのであれば、キリストとともに生きることにもなる、と信じます。」キリストと結ばれた私たちは、キリストとともに死んだだけでなく、キリストの復活のいのちに結ばれています。続く9節は一見当たり前のことを述べているようです。「キリストは死者の中からよみがえって、もはや死ぬことはなく、死はもはやキリストを支配しないことを、私たちは知っています。」復活したキリストが再び死の下に引き戻されるということはあり得ません。パウロがわざわざこんなことを述べているのは、私たちは自分についてそう考えやすいからだと思います。私はキリストとともに復活のいのちに生かされているとある時は信じて、ある時はまた以前の状態に戻ったかのように考えてしまう。その日によって復活のいのちに気づかっていたり、また死と罪の下に引き戻されたり・・・しかしそういうことはないのです。キリストは復活して、もはや死の下にはいないのです。10節に「キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり」とあります。キリストはあの十字架の死において、私たちの罪のための精算を全部つけてくださいました。そして罪とは決定的なお別れをして、今や神に対して生きています。であるなら、そのことはキリストに結ばれている私たちについても同様に言えるのです。

以上のまとめの言葉が11節です：「このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思いなさい。」これは私たちにどんなメッセージを語っているのでしょうか。これは私たちに、「罪に対して死に、神に対して生きなさい！」と命令している言葉ではありません。そうではなく、「すでにそういう者であると思いなさい！」と言っている御言葉です。この「思いなさい」というのは、そうでないけれどもそう思うことにしなさいという意味ではなく、これが事実であると認めなさいという意味です。このことを受け止めなさい、わきまえなさい、自分がこういう者であることを良く自覚しなさい。ですから聖化を考える上でまず重要なのは、自分自身についての理解なのです。自分は今やキリストにあってどういう者とされているのか、そのことを神の言葉に従ってしっかり受け止めること。それがスタートポイントなのです。

6 節と 7 節に「罪の奴隷ではない」とか「解放されている」とありましたが、具体的に解放された奴隷のことを考えてみていただきたいと思います。その人は以前は奴隷でした。しかしある日をもって、奴隷解放宣言によって、奴隷の身分から解放されました。ところがその人は長らく奴隷として生活して来たために、自分についてのその考えからなかなか抜け出すことができないということが起こり得ます。かつての主人を見てはびくびくし、おどおどし、奴隷の振る舞いを続けるかも知れません。その場合は、その人に言ってあげなくてはなりません。「あなたはもう奴隷ではないのですよ！あなたはもう解放されたのですよ！奴隷のように生活しなくてもいいですよ！」と。もしかすると事あるごとにその人に繰り返し言ってあげなくてはならないかもしれません。そうしてその人が自分の今の本当の立場を正しく受け止め、受け入れる時に、その人の生活は変わって行くでしょう。私たちも同じです。私たちは罪に対して死んだと言われています。もうその支配下にはありません。今やキリストにあって神に対して生きるという新しい状態に入れられています。そういう自分であることをまず良く知りなさい！そのことを受け止めなさい！そこにしっかり立ちなさい！このような素晴らしい恵みの事実を、11 節は私たちに教えてくれているのです。

この事実に基づいて 12～14 節の勧めが語られます。まず 12 節：「ですから、あなたがたの死ぬべきからだを罪の支配にゆだねて、その情欲に従ってはいけません。」今やクリスチャンは罪の支配下に生きているのではないのですから、まるでその下にあるかのように考えて、罪の支配に自らをささげてはならないということです。13 節には「手足を不義の器として罪にささげてはいけません」とあります。ここで「手足」と訳されている言葉は、体の様々な器官を指す言葉です。英語では体の parts とか members と訳されています。新共同訳は「五体」と訳しています。先にも触れた通り、私たちはともすると、心や霊において私は純粋に神を信仰しているが、この肉体はどうもそうはいかないと考えがちではないでしょうか。頭では否定しているはずの霊肉二元論にいつしか陥って、私の肉体は私の霊に比べてより劣る部分である。天国に行くまで墮落しがちな部分であると見下して、その結果、戦いを放棄して、やむを得ないと情欲に身を委ねる誤りに陥るかもしれません。しかしパウロはその考えを否定しています。先に見たように、罪のからだはす

でに滅びたのです。ですから私たちはこの五体を、その目、耳、口、手足を、神のためにささげる新しい生き方にこそ用いるべきなのです。不義の器としてではなく、義の器として、神に喜ばれることのためにささげるべきなのです。

そんなことは無理だ！この私にはできるはずがない！と思いがちな私たちに、最後の 14 節はもう一度、励ましを語っています。すなわち「罪はあなたがたを支配することはない」と。「あなたはもう罪の奴隷ではないのですよ」と。「律法の下にない」という表現は「罪の下にない」と同じことを言っていますが、これについては次回 15 節以降を見る時に一緒に見ます。とりあえずその表現はそこにおいて、ここで心に留めたいのは、その次の「恵みの下にある」ということです。私たちは今や罪の奴隷状態にあるのではなく、神の恵みの力の下にあるのです。

前回は述べましたように、「罪に対して死んだ私たち」という表現は、私たちに罪がなくなるという意味ではありません。もう罪を犯さない、完全な人になったという意味ではありません。地上にある限り、最後の日まで罪との激しい戦いの中にあるというのは真実です。しかしその戦いをするために私たちがしっかり知っておくべき真理は、私たちは以前の私たちが置かれていた状態とは大きく違っているということです。今や罪の支配下にあるのではない。その圧政からはすでに解放された者である。これをわきまえていなければ、最初から負けてしまうのは明らかです。実際は以前と立場が大きく変えられているのに、前と同じ生活を続けてしまう。キリストにある新しい状態を受け止めていないために、それと矛盾する生活を送ってしまう。そんな私たちにとって大切なのは 11 節の言葉です。「このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思いなさい。」自分がこのような者とされていることをはっきりと自覚しなさい。そこから私たちの新しい生活は始まるのです。手足を不義の器として以前のように罪にささげるのではなく、義の器として神に対してささげる生活が導かれるのです。